

# ルドルフ・フォン・ラバン 「ドイツのタンツビューネ —前史と展望—」<sup>1)</sup>

Rudolf von Laban, « Die deutsche Tanzbühne. Vorgeschichte und Ausblick » (1936)

タンツビューネという理想は、一個の舞踊芸術の発生と切り離すことができない。その舞踊芸術は娯楽産業を越え出、姉妹芸術である音楽と詩との気高い目的に仕えた競争に入る。人々の魂に浸透し、彼らの倫理観を高めて意義深い現象世界の美をリズムの動勢において把握できるようにするためである。

ドイツは我々の時代のこの理想が最も早くまた最も深く根を下ろした国である。それゆえ身体運動を媒体とする芸術の新たなパワーゲームに熱狂した諸国の人々は、この舞踊を「ドイツの舞踊」と呼ぶ。またそれゆえドイツでは最初のタンツビューネが出現したのだが、それは劇場から分離したバレエ団とは異なり、運動芸術の独立したショウの舞台とみなされねばならない。

ハンブルクで十数年前に、タンツビューネに拠点となる我が家を与えようという構想を実行し、一つはごく小さくもう一つは巨大な二つのホールで連続して公演を打った際、我々はすぐさま、舞踊芸術が新しい時代に向けて成熟しつつあることに気づいた。それは、我々がその精神を身の周りで徒に探しまわった時代、病んで意味を失った興行機構に我々の理念を異物として押し込めねばならず、考えられ得る限り最大の矛盾を呈していた時代であった。にもかかわらずそのタンツビューネは最初の舞踊専門の劇場となり、そこには誠実な観客サークル、一群の熱心な上演者、悲喜こもごもを含め活力ある劇場に附随するすべてがあった。

このような最初の短い勝利がもたらされる以前は、諸々の闘争—興隆と転落があった。この道を実際に辿った者の中には、そのまた何年も前にタンツビューネの誕生を体験し、また自ら参加していた者もいた。例えば私はかつて、ミュンヘンの謝肉祭の折りに、数百人もの参加者を擁する大規模なクロスによる舞踊劇を催す機会を得た。新しい舞踊芸術の熱意ある擁護者ハンス・ブランドンブルクは、そこにドイツの未来の劇場の萌芽を認めた。劇の内容は、主催したサークルの仕事にまつわる苦楽を舞踊で表現したものとなった。医療従事者の祭りでは医療術、美術家サークルの祭りでは造形芸術、その他

の催しでは手工芸品—そこにやって来た誰もが我々の構想力にふんだんに素材を与えてくれた。実際何年か後に私は、ウィーンの製造業の舞踊による祝祭パレードで同様のものを生み出すことになった。その際は考え得る限りすべての製造業種を営む数万の人々が、7キロにわたる行列をなし、走行するタンツビューネを含む数百の山車とともに、数百万の観客のそばを通り過ぎた。2千5百もの芸術家とアマチュアによる舞踊家の行進がそれに伴走し、仕事に従事する様子を描いた絵画をリズムで取り囲んだ。この圧倒的な力を持つドイツの芸術舞踊の表明行為は、一昼夜で跡形もなく消え去ったが、我々舞踊家の中に、ドイツのタンツビューネのますます明確になりゆく理想像を残した。

最も名を成した私の弟子たち、特にマリー・ヴィグマンらは、自前で私の場合と並ぶタンツビューネを設け、それはあたかも偉大な構想がとうとう足場を築きつつあるかのようなのである。また諸外国もこれに耳をそばだて、半信半疑の畏敬とともにこの新たな現象を好意的に迎えてくれた。

その後このような活動は一般に広がりつつあるように思われる。ハンブルクで私は最初のアマチュア舞踊クロス集団を組織したが、すぐさまあらゆる場所で数多の後続が現れた。マンハイム国立劇場の創立150周年には、500名のアマチュア舞踊手からなる青年集団が、運動競技場に設けた劇場に、私の舞踊劇『日常と祝祭』を奉納した。これらすべての大小の催しの中で、タンツビューネの課題と目標はいよいよ意識されていった。

さらに多くの事柄がここに加わってくる。その間私は客員として、ときに数年通しの専門職を得て、舞踊と言葉や音色の関係について、大舞台における舞踊指導者としての見識を深めてきた。私の支援者と弟子達同様、私自身にとっても、独立したタンツビューネのみが我々が思い描く理念を実現できることが明らかになってきた。しかし祝宴とパレード、クロス劇と祭りの輪舞、室内舞踊と舞踊劇と同様に、我々は劇場についても多くを学んできた。すなわちどうあるべきで、どうあってはならな

1) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Die tänzerische Situation unserer Zeit. Ein Querschnitt. Carl Reißner Verlag, Dresden 1936. S. 3-7.

いかということ。

ドイツの舞台芸術の本質に対する壮大な認識を、我々はバイロイトのヴァーグナー音楽祭に参加した折りにも得た。ドイツの舞台芸術の最も偉大な巨匠は、我々舞踊家にも何を実現すべきか示しているということ、私は何度でも繰り返さねばならない。もちろん成し遂げるにはヴァーグナーの演出の伝統に関する正確な知識が必要となる。ジークフリート・ヴァーグナーから最初にバイロイトに招聘された時、彼の友情溢れる助言により、私は次のことに目を開かれた。すなわち、我々はこのドイツの劇場における芸術創造の源泉においても、舞踊の劇場の精神と職務のために多くを学ぶことができるのだ。私にとって最も喜ばしいのは、ジークフリート・ヴァーグナーその人が、新しいドイツの舞踊芸術の中に、巨匠の道の発展形を見てとり、ドイツのタンツビューネの出現を我々と共に望んでいるということだ。

外国人達は最も広範囲において、舞踊がいかにあらゆる場所で祝祭体験や人間の精神的高揚と結びついているか、しかしかにかに恥知らずでけしからぬことに不当な扱いを受けているか教えてくれる。

私はまだ、今日すでに消えつつある古代の舞踊文化を、半ば生きたかたちで体験するという幸運に恵まれた。例えばインド人の大規模な祝祭舞踊、中国の京劇の中の舞踊は、舞踊芸術の根源についての忘れ得ぬ印象や認識と並び、我々自身の運動体験の種類とその境界に関する明確な尺度を与えてくれた。それだけにいっそう、ある時期ドイツの舞踊を覆い尽くさんばかりに脅かした、異なる地域と遠い時代の様式の病的な模倣は、気まずく心が痛むのである。また我々の構想する獲得困難なタンツビューネとコロス集団は、同じく創作における無能力の波によって打ち砕かれ引き裂かれる。自らの手蹟を刻んだ作品の代わりに、新しい着想に手をつけようとしてかえって損なってしまったものが席卷するかに見える。リズムへの愛好は、歯止めを知らぬ興奮状態へと墮

落する。

しかし瓦礫の下で創造の閃きは炎を絶やさない。我々舞踊家は明確かつ真正なものを削ぎ出してゆくため可能なことすべてを試みる。舞踊家会議において、舞踊コンクールにおいて、我々は常にドイツの舞踊芸術にさらなる勝利をもたらしてきた。そしてタンツビューネという構想は繰り返し浮上する。真正の運動体験を追求する芸術家の共同体としてのタンツビューネであり、この新しい芸術の我が家でありショウの舞台であるタンツビューネだ。

今日我々が帝国文化院の先見の明ある助成により、再びドイツのタンツビューネの創立のとは口に立っているとすれば、我々がドイツの舞踊に集合場所、そう、我が家と呼びうる場を生み出そうとしているのなら、過去の経験に立ちつつも新たな道を模索しなければならない。舞踊に課せられ得る使命の多様さは、私が手短かに述べてきた体験から、ドイツのタンツビューネの発展の途上に見て取られるであろう。終わらぬおしゃべりと諍いを伴い、選択も秩序もなく演目を並べるような会議を今日招集しないのは、そういった舞踊家による議会の形態を控えるべき理由を知り尽くしたからである。我々は、賞与や資格をかけたコンクールを催すつもりもない。我々は多数の人民志士が舞踊芸術に親しめるように、舞踊芸術の祭典を催すのだ。我々はこの仕事を鑑賞と判断に供する。我々は、この芸術の中に感じ取られる喜びと興奮の種を民族共同体に手渡す所存だ。我々は、我々の表現手段と漲る力に備わる言語を、我々民族が実現すべく総統が不動の明晰さで道を指し示す偉大な使命に役立てたいのだ。

我らに成功あれ。「ドイツ祝祭舞踊劇 1934」においてこの目的への最初の第一歩を踏み出し、礎石をうがつことを。

ドイツのタンツビューネのため！

(訳：古後奈緒子)